京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成23年1月9日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会長　辻　井　昭　雄　様

所属部局･研究科　こころの未来研究センター

職 名･学 年　特定研究員

氏　　名　大 石 高 典

事業区分	平成22年度　・　中期派遣助成	
研究課題名	中央アフリカ熱帯雨林住民の淡水魚類認知に関する比較民族魚類学的研究	
受入機関	フランス国立パリ自然史博物館･リヨン第二大学･国立科学研究所（フランス）、University College London（イギリス）、王立中央アフリカ博物館（ベルギー）、マックス･プランク鳥類学研究所人間行動科学部門（ドイツ）	
渡航期間	平成22年10月25日　～　平成22年12月26日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度･和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☑ 無　□ 有(　　)	
会計報告	交付を受けた助成金額	550,000円
	使用した助成金額	550,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳（使用旅費の内容）	航空費･燃油サーチャージ･空港使用料：256,980円
		鉄道賃：24,360円
		宿泊料：217,426円
		日当：183,000円
		（上記合計 681,766円に充当）

成果の概要/ 大石高典

受け入れ研究機関であるフランス国立パリ自然史博物館民族生物学・環境人類学研究室（国立科学研究所所属）を拠点に、王立中央アフリカ博物館（ベルギー）、リヨン第２大学言語ダイナミクス研究所（フランス）、University College London（イギリス）、マックス・プランク鳥類学研究所人間行動科学部門（ドイツ）の諸研究機関を訪問した。

パリ自然史博物館では主にアフリカや南米などの熱帯地域における淡水漁撈の専門家であるエレーヌ・パジュジー博士や中部アフリカの狩猟採集民と農耕民社会の間の民族生物学的な知識のやり取りに詳しいセルジュ・バウシェ博士にアドバイスを受けつつ、カメルーン東南部熱帯雨林における淡水漁撈に関する資料の分析および論文執筆を進めた。１２月７日には、研究セミナーを開催し「カメルーンの熱帯林地域における農耕民・狩猟採集民の貨幣経済への適応努力の比較と食や性における社会規範の維持/変容」について、研究発表と討議を行った。２０人以上の参加者を得て、貴重な意見やコメントを得ることができた。同研究室名誉教授で、フランスにおける生態人類学・食人類学研究の草分け的存在であるイゴール・ド・ガリーン博士に招かれ、同博士の自宅兼研究室となっている南仏ポー市近郊を訪ねた。カメルーンにおける人類学研究の生き字引と言ってもよい同博士から研究へのコメントや今後の展開へのアドバイスをいただけたのは大変幸運なことであった。

また、同博物館水族研究部門のジェラール・マルケ博士らの協力を得て、カメルーン東南部で収集した、食用甲殻類（エビ・カニ類）および貝類の同定を行った。当初、日本から持参した魚類標本の同定も同博物館で行う予定であったが、西アフリカの淡水魚類を専門とするディディエ・ポージー博士のアドバイスにより、ベルギー・ブリュッセルの王立中央アフリカ博物館（MRAC）の魚類学研究室を紹介してもらい、１週間ベルギーに出張してこれらの標本の同定作業を行った。ジョス・スノークス博士（東アフリカのカワスズメ類を専門）、およびエマニュエル・ブレーベン博士（西・中央アフリカのトゲウナギ類ほかを専門）をはじめとする魚類学研究室には、コンゴ川水系各地の魚類標本が豊富にあり、またアフリカ産淡水魚に関する文献やスタッフも揃っており、同定作業を進めるだけでなく、この地域の魚類学や水産学の展開について様々な知見を得ることができた。今後も、標本やデータの少ないカメルーン東南部やコンゴ共和国北部のコンゴ川支流の魚類調査における協力や、同研究室がアフリカ地域について担当している魚類についてのオンライン・データベースである Fish Base（フィッシュ・ベース）プロジェクトにおける協力・研究交流を行ってゆく予定である。

リヨン第 2 大学言語ダイナミクス研究所では、同研究所に招へい研究者として滞在中のパトリック・ダウダ博士（ガボン、オマール・ボンゴ大学言語学研究室教授）、および同研究所博士後期課程大学院生らとバクウェレ文化に関する共同研究の打ち合わせを行った。私は、「カメルーン東南部のバクウェレ人の漁撈活動と魚食タブー」について報告を行うとともに、カメルーン東南部およびコンゴ共和国サンガ州におけるバクウェレ人の居住形態や生業生態の多様性について紹介した。言語学、歴史学の視点からの発表をも踏まえて、「中部アフリカ三カ国（カメルーン、コンゴ、ガボン）の熱帯森林地帯に散らばって居住するバクウェレ人諸集団(BantuA85b)の言語、環境利用と食、社会関係と儀礼、遺伝的類縁関係の比較と文化進化」について、国際共同研究を進めていく方向で合意を得た。

University College London では、人類学部門で社会人類学を担当しているジェローム・ルイス

博士の研究室を訪問し、コンゴ盆地北西部のピグミー系狩猟採集民と農耕民の民族間関係や自然保護政策と土地資源の所有権・使用権をめぐる問題について情報交換を行った。また、ルイス博士の推薦により人類学部門の西アフリカ研究セミナーにて「カカオ豆、土地、そして森：カメルーン東南部の狩猟採集民バカは、いかに平等主義規範を維持しつつ市場経済に適応しようとしているか」というタイトルで研究発表を行い、討議を行った。同セミナー担当教官であるバリー・シャープ博士はじめ 15 人以上の参加者から有意義な質問、コメントを得ることができた。

マックスプランク鳥類学研究所人間行動学部門では、インドネシア領ニューギニア高地をフィールドとする医療人類学者・人間行動学者のウルフ・シーフェンフェーベル博士を訪問し、人間行動学（ヒューマン・エソロジー）的手法により集められた映像資料を用いた、世界各地のこどもの食の分配行動の比較研究の可能性について議論を行った。

以上のように、２ヶ月間という短期間の在外研究であったが、「中央アフリカ熱帯雨林住民の淡水魚類認知に関する比較民族魚類学的研究」というテーマを軸に、多様な研究交流を行うことができた。